

令和7年度
杉並区次世代育成基金活用事業
**長崎平和学習
中学生派遣事業**

報告書



Nagasaki
—そこに立ち、何を考える—



はじめに

杉並区長

岸本聰子



Nagasaki

—ここから行動をはじめる—

目 次

はじめに.....	1
事業概要.....	2
派遣行程表.....	3
事前学習会.....	4
長崎派遣.....	6
事後学習会・成果報告会.....	9
発表スライド.....	10
■ A班 派遣報告	11
■ B班 派遣報告	18
■ C班 派遣報告	25
■ D班 派遣報告	32
私の平和宣言.....	40
杉並区平和都市宣言.....	41



平和学習中学生派遣事業は、令和4年から3回、広島市を訪れ、戦後80年、節目の年となる今年、もう一つの被爆地である長崎市を訪れました。派遣生は、原爆資料館の見学や平和祈念式典への参列、被爆者の講話、同世代等の交流など、現地で戦争や原爆被害の実相に触れながら、精力的に活動を行いました。

一方で、同時期に長崎で開催される第11回平和首長会議被爆80周年記念総会に出席するため、私も長崎を訪れ、総会や平和祈念式典に参列するとともに原爆資料館も訪れました。総会では世界各国や国内自治体の代表者による「平和文化の振興」などをテーマにした様々な平和に関する議題について討議し、長崎を最後の被爆地にと示した「ナガサキアピール」を採択しました。

こうした中、杉並区平和都市宣言にあるとおり、「世界の恒久平和は、人類共通の願いである。」とあらためて認識し、二度と戦争は起こしてはならないとの思いを強くしたところです。

また、現地で派遣生と交流する機会があり、過去の戦争や被爆の実相に真剣に向き合い、自分自身に結び付けて考える努力を感じました。多くの派遣生からは、「現地へ赴く大切さ」を実感したとの意見も聞くことができ、平和に向けて自らができるを考え、決意新たに取り組む派遣生の姿を見て、核兵器のない平和な未来の実現に向けた可能性を大きく感じました。

本報告書をお読みいただいた皆様も、これを機に、平和への想いを新たにしていただく、一助になることを願い、自分ごととしてとらえ、実践に繋げることに期待しています。

結びに、本事業の実施に当たり、ご協力をいただいた方々、杉並区次世代育成基金を通じて本事業を支えていただいた皆様に心から感謝申し上げます。

令和7(2025)年12月

目的

次世代を担う中学生が、長崎を訪ね被爆の実相にふれるとともに、現地の学生等との交流を通じ「平和」の大切さを学び伝える。

スケジュール

区分	日 時	内 容
第1回 事前学習会	7月 7日(月) 午後5時～午後7時30分	・自己紹介 ・講義 (講師:第五福竜丸展示館 学芸員 市田 真理氏) ・グループ学習
第2回 事前学習会	7月30日(水) 午前9時～午後3時	・被爆の概要説明 (講師:広島市被爆体験伝承者 楠原 泰一氏) ・被爆者との交流 (杉並光友会ほか) ・未来型平和学習 (講師:NPO法人ボーダレスファウンデーション 中村涼香氏) ・グループ学習
長崎派遣	8月 8日(金)～10日(日)2泊3日	
事後学習会	8月20日(水) 午前9時～午後3時	・成果報告会リハーサル
成果報告会	8月30日(土) 午後2時～午後4時	・グループ発表 ・教育長、杉並光友会、派遣生によるトークセッション ・私の平和宣言

派遣生 (区内在住の中学校2・3年生24名)

氏 名	学年	学校名	氏 名	学年	学校名	氏 名	学年	学校名
荒木 みなみ	3	高南中学校	曾根 純	3	荻窪中学校	久原 万智子	2	大宮中学校
青木 佑磨	2	阿佐ヶ谷中学校	立蘭 一誠	2	神明中学校	大塚 優莉	2	泉南中学校
笠原 巧充	2	松溪中学校	二場 琉斗	2	神明中学校	藤居 晴紀	3	西宮中学校
小澤 侑奈	2	天沼中学校	岩井 健世	2	高井戸中学校	文野 陽菜	2	西宮中学校
長谷川 葵	2	東原中学校	鈴木 糸	2	向陽中学校	土 純子	8*	杉並和泉学園
脇 勇斗	3	中瀬中学校	鈴木 伶來	2	向陽中学校	奥野 叶琶	8*	高円寺学園
池田 悠理	2	井荻中学校	鈴木 貴太	3	松ノ木中学校	南 麟	8*	高円寺学園
石坂 紗和	3	井草中学校	水谷 遼	3	松ノ木中学校	松田 実咲	3	文化学園大学 杉並中学校

* 小中一貫教育校の学年

引率者 (7名)

氏 名	所 属	氏 名	所 属	氏 名	所 属
河合 健太郎	井草中学校 主幹教諭	細川 隆弘	教育委員会事務局 教育人事・指導課 指導主事	小川 綾子	区民生活部管理課 平和事業担当
中野 鮎	高井戸中学校 主任教諭	渡邊 秀則	区民生活部管理課長		
三輪 巧介	高円寺学園 主幹教諭	荒井 栄一	区民生活部管理課 平和事業担当係長		

派遣行程表 令和7年8月8日(金)～10日(日)2泊3日

日 程	時 間	行 程	内 容等
8/8 金	8 : 30	羽田空港集合・出発式	
	9 : 55	羽田空港発/JAL607	
	—	昼食 (機内)	
	11 : 45	長崎空港着	
	13 : 30～14 : 50	「原爆資料館」見学	
	15 : 00～16 : 30	班別フィールドワーク (原爆落下中心地、平和公園、如己堂(永井隆記念館))	平和案内人による解説付
	17 : 00	ホテル着・1日の記録を記入	
	18 : 00	夕食・区長とのディスカッション(ホテル)	
8/9 土	22 : 00	就寝	
	7 : 00	朝食	
	9 : 00～ 9 : 40	「城山小学校平和祈念館」見学	
	10 : 40～11 : 45	「平和祈念式典」参列	
	12 : 15	昼食 (和泉屋平和公園前店)	
	14 : 00～14 : 20	「長崎県防空本部跡(立山防空壕)」見学	
	14 : 30～15 : 30	「被爆体験講話」聴講(長崎歴史文化博物館)	末永浩さんのお話
	16 : 00～17 : 00	班別フィールドワーク (一本柱鳥居、山王神社(クスノキ)、長崎大学医学部)	平和案内人による解説付
	17 : 30	夕食(ANAクラウンプラザホテル長崎グラバーヒル)	夕食後、グループ学習
	19 : 30	ホテル着・1日の記録を記入	
8/10 日	22 : 00	就寝	
	7 : 00	朝食	
	9 : 00～11 : 00	「交流プログラム」参加 (長崎市役所 多目的スペース)	Peace Education Lab Nagasaki (PLAB)との交流
	11 : 30	昼食(出島テラス)	
	16 : 30	長崎空港発(JAL612)	天候不良のため、飛行機出発遅延 (当初15:05出発予定)
	18 : 30	羽田空港着	
	19 : 15	解散式終了後、現地解散	

※宿泊先：長崎ホテルマリンワールド



事前学習会 1

■日時：7月7日(月) 午後5時～午後7時30分
■場所：杉並区役所 第5・6会議室

※杉並区の原水爆禁止署名運動の歴史は、
こちらからご覧いただけます→



学習会冒頭、区長からの応援メッセージを受け、区の代表として決意を新たにした派遣生。
その後、自己紹介や班ごとのアイスブレイクで緊張をほぐし、第五福竜丸展示館学芸員の市田さんから「ビキニ事件と杉並区の原水爆禁止署名運動*」の歴史について講義を受けました。
後半は、24人が4班に分かれてのグループ学習。「あなたが思う平和とは」、「その平和のために私たちができるすることは」について、ディスカッションを行いました。



事前学習会 2

■日時：7月30日(火) 午前9時～午後3時
■場所：杉並区役所 第5・6会議室

被爆の概要説明・被爆者との交流

まずは、広島市被爆体験伝承者の楢原さんから、被爆の概要を学びました。

その後、杉並光友会(区内に住む原爆被爆者の会)の協力のもと、4名の被爆者の方においでいただき、車座になって対話。ご自身の体験談、平和への思いや中学生に願うことなどを伺いました。



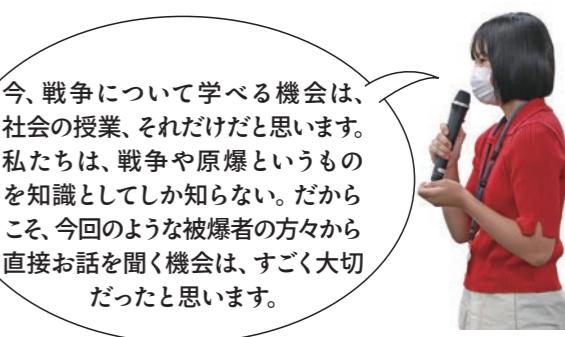
久保田 朋子さん

西尾 瞳子さん



山田 玲子さん

杉野 信子さん



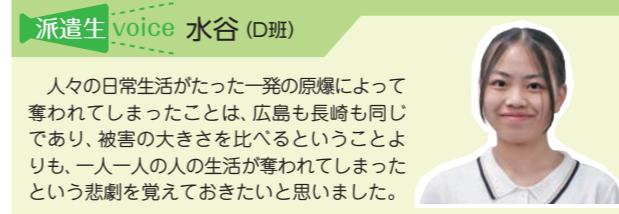
未来型平和学習

講師は、NPO法人ボーダレスファウンデーションの中村涼香さん。長崎を拠点に高校時代から核廃絶に取り組み、国際会議でのスピーチなどグローバルな活動を続ける同世代の方から「平和のために私ができるコト」をテーマに講義を受けました。



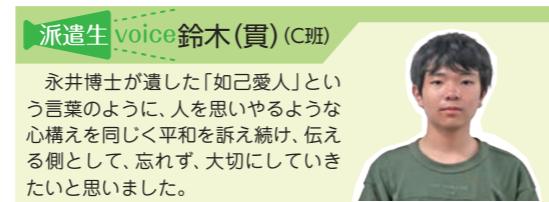
グループ学習

1回目の事前学習会で出た意見を基に、班ごとに学習テーマを考えました。8月30日の成果報告会に向かって、その内容・目的・役割分担等をみんなで話し合いました。



長崎派遣

1st day 8月8日金 東京→長崎

START 08:30～ 羽田空港集合 09:55 羽田空港発	■羽田空港で出発式～長崎空港到着   
11:45 長崎空港着	出発式での代表生徒あいさつ 飛行機に乗り込み羽田空港出発 長崎空港到着
13:30～14:50 原爆資料館	■「原爆資料館」見学 被爆の惨状をはじめ原爆が投下されるに至った経過や核兵器開発の歴史などを展示した資料館です。数多くの資料から、原爆の非人道性、被害の甚大さ、被爆者の苦しみや悲しみなど、被爆の実相を学びました。    
移動	
15:00～16:30 原爆落下中心地、平和公園、如己堂(永井隆記念館)	■班別フィールドワーク 原爆落下中心地からスタートし、平和公園、如己堂(永井隆記念館)を平和案内人と一緒に巡りました。公園内には、長崎の平和のシンボル「平和祈念像」や平和を願うたくさんの碑があり、改めて平和の大切さを実感した派遣生。続く、如己堂では、隣人愛による恒久平和を訴え、願い続けた永井隆博士の生涯を知ることができました。   
17:00 ホテル到着	■夕食、区長とのディスカッション、グループ学習  
18:00～20:00 ホテル内	

2nd day 8月9日土 長崎滞在

START 08:30～ ホテル発	■「城山小学校平和祈念館」見学 爆心地からわずか約500mという至近距離で被爆した城山国民学校。一瞬にして、1,400余名の児童や教職員など多くの尊い命が奪われました。その後、校舎の一部を保存・利用して開館した平和祈念館には、炭化した木煉瓦や被爆当時の写真パネル等が展示され、被爆遺構を肌で感じることができました。   
10:40～11:45 平和公園	■「平和祈念式典」参列 原爆投下から80回目の「原爆の日」を迎えた9日、平和公園で「平和祈念式典」が行われました。朝から激しく降り続いた雨も直前で止み、厳かな空気の中、長崎市長の平和宣言や被爆者代表による平和への誓いに真剣に耳を傾けました。   
14:00～14:20 長崎県防空本部跡(立山防空壕)	■「長崎県防空本部跡(立山防空壕)」見学 太平洋戦争中、知事室や警察部長室、防空監視隊本部などが配置され、県の防空施策の中心的役割を担っていた防空壕跡です。施設と通路の一部を見学することができました。  
14:30～15:30 長崎歴史文化博物館	■「被爆体験講話」聴講 9歳で被爆された末永浩さんから被爆体験講話を伺いました。資料や身振り手振りを交えて伝えてくださった当時の生々しい証言からは、記録や映像だけでは伝わらない重みを感じました。  

2nd day 8月9日(土) 長崎滞在

16:00~17:00
一本柱鳥居、
山王神社(クスノキ)、
長崎大学医学部



被爆クスノキ

■班別フィールドワーク

2日目も平和案内人にガイドいただきながら、被爆遺構を巡りました。原爆の爆風により半分が吹き飛ばされた一本柱鳥居からは、原爆の脅威がひしひし伝わり、被爆クスノキからは、被災に耐え、今なおたくましく育つ生命力を感じることができました。



派遣生 voice 文野(D班)
今の平和は、決して当たり前ではなく、多くの犠牲の上に成り立っていることを実感しました。

17:30~19:15
ホテル内

■夕食、グループ学習 (ANAクラウンプラザホテル長崎グラバーヒル)

3rd day 8月10日(日) 長崎→東京

START 08:30~
ホテル発

09:00~11:00
長崎市役所

■「交流プログラム」参加

長崎を拠点とし、平和をテーマにした体験学習プログラムの提供をしているPeace Education Lab Nagasaki(PLAB)の皆さんとの交流。派遣生は、長崎で活動する大学生のピースバディと、平和について共に考え、意見を交わす貴重な時間を過ごしました。



13:30
長崎空港着



16:30
長崎空港発

■帰路

悪天候の影響で定刻より1時間ほど遅延しましたが、無事に長崎を離陸。3日間の充実した行程を終え、一路東京へ。

派遣生 voice 立薙(A班)

平和案内人さんの「長崎は最後の被爆地だ」という言葉がとても心に残っています。今回ここで経験を終わらせず、次世代につなげていくことが大切だと思いました。

■羽田空港で解散式



18:30
羽田空港着
19:15
羽田空港現地解散

事後学習会

■日時：8月20日(火) 午前9時～午後3時
■場所：杉並区役所 第5・6会議室

長崎派遣から約2週間後、事後学習会を開催。各自が作成した資料を班ごとにまとめ、成果報告会のリハーサルを行いました。



成果報告会

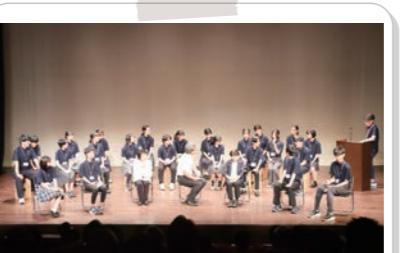
■日時：8月30日(土) 午後2時～午後4時
■場所：座・高円寺2

派遣生は班ごとに、長崎で体験したこと、ともに学んだことを自分たちの言葉で報告。その後のトークセッションでは、教育長と派遣生が互いに質問し合い、杉並光友会(区内に住む原爆被爆者の会)からは派遣生へのエールが送られ、会場全体で平和を考える有意義な時間となりました。

最後に、平和のために自分たちができるアクション「私の平和宣言」を発表し、これからも行動し続けることを宣言しました。
(派遣生の「私の平和宣言」は、P12以降の個人ページに掲載)



班ごとの成果報告



トークセッション



私の平和宣言



来場者 voice

心に響く発表を聞き、改めて、日本人として伝え続ける必要性を感じました。
「知ろうとしないことは罪」という言葉が強くさざり、私自身の戦争や核への考え方が変化しました。

伝える活動

戦争の悲惨さや平和の尊さを伝えることの大切さを学んだ派遣生は、成果報告会終了後、所属校でも発表を行っています。
自らの体験を友人や教員に共有し、伝える活動のスタートを切りました。



発表スライド

派遣生が成果報告会で発表したスライドの一部です。
班ごとに学習テーマを決め、1人2枚ずつのスライドをPowerPointで作成し、発表を行いました。

A班



「原爆と向き合う」
～平和を巡る思考～

A班
曾根 塔実 青木 佑磨
松田 美咲 立園 一城
南 順 爰原 巧充

核兵器は必要か?
死者 抑止 被爆 熱線
放射線 煙風 苦しみ 核兵器
攻撃される 不安 安全保障

僕がみんなの話を聞いて

被爆地以外での平和教育を
被爆地以外での平和教育が未熟
原爆に興味を持つ生徒を増やす
平和教育が被爆地以外に広まる

つながっているバトン
・被爆者はつながっています
・平和運動の人々やピースクラウドの活動
・自分たちもバトンをつないでいきたい

未来への行動～私たちが出来ること
地域・学校
一人ひとりの小さな声をつなぐ
国際交流 デジタル活用

伝えたいこと
憲法9条というものを世界にも取り入れていってほしい
→世界全体の平和の実現が可能なのでは
「広島、長崎のようなことを三度と起こさない」

世界には
1万2000発
以上の核兵器
がある

B班



過去～現在～未来
～おもいを結ぶ～

B班
小澤栄奈 石坂紗和 上野子
池田理恵 鹿木玲香

原爆の修復
▲焼け残る建物
▼焼け残った少女
▲被爆者の命
「生き残れ」
全員に被爆を
経たかった▶

平和とは

伝えたいこと
長崎という地に立って感じた想い
1. 黒葉にしなくとも伝わる感情
2. 当たり前ということがさせ
伝えたい

C班



繋ぐ
～80年語った今、伝えたいこと～

C班
荒木みなみ 久原万里子
若井健世 鈴木実太
大津優莉 長崎千葉

被爆者の方のお話の様子
投下後の遺壟の様子
ほかの方の証言・言葉
僕たちにできること

男子学生の弁当箱
+防空壕
女子学生の作業服

原爆津というか
人類を滅ぼさせるもの・絶対に使ってはダメ
まつたすべてがおしまい

被爆者の方のお話の様子
投下後の遺壟の様子
ほかの方の証言・言葉
僕たちにできること

僕たちにできること
知ること、考えること、伝えること

D班



平和のカタチ
～失ったもの 得たもの～

D班
黒川真一 長崎千葉
二葉由佳 大野裕美
鈴木みか 長野叶留

投下目標の【日本】
長崎の連合国軍捕虜収容所
B29名 称(ボックスカー)

たった1発の原爆で長崎がどう変わってしまったのか
被爆前の中心地区
被爆から1ヶ月後の同じ場所

永井隆さんが行った活動～伝える事の力～
永井隆さん 永井隆さんが執筆した本
平和への取り組み
春月9日の「平和セミナー」
被爆体験講話を聴いて、平和をめざす
ピーススピーチの準備
・被爆遺跡の清掃活動など

復興のシンボル
被爆クスノキ
・樹齢 500-600年
・枯死寸前になる
・被爆時に被災を免れてく

「また明日!」といえる世界へ



長崎は2番目ではなく最後にしなければいけない。
そのために動かなければいけないのは、私たちです。



学習テーマ

原爆と向き合う～平和をめぐる思考～

被爆者の方の声は、私たちにとって
ものすごく大切なメッセージを届けてくれます。
だからこそ、この80年間繋ぎ続けてくれた思いを
私たちも絶やさず伝え、繋いでいかなければなりません。



1 学習テーマ 原爆と向き合う～平和をめぐる思考～

この班のテーマから僕が感じたことは、原爆を使用してはならないことです。

原爆は使用すると沢山の人の命を奪い、命が助かったとしてもひどい怪我や火傷、そして被爆してしまい町は、吹き飛び草木は枯れ、その地はすべてが焼失してしまう。原爆が投下された直後の人たちは、皮膚が爛れ火傷で水を求める人たちがあり、川や救護水の中に飛び込んだそうです。

生き残った人の中には、無傷の人もいましたが原爆による放射能によって被爆してしまい、多くの方が亡くなり放射線の被害は生き残った人々にも深刻な健康被害を脅かし続けています。

今でも核兵器を保有している国が何ヶ国もありますが、僕たち若い世代が伝えていかなければならぬと思います。

平和とは人種や性別に囚われず、同じ人間として悲惨な歴史を忘れずに、新しい世代へ語り継いでいくのが僕たちの使命を果たしていきたいと思います。

2 感じたこと、学んだこと 平和の大切さ

僕がこの長崎への平和学習派遣生として、学んだことは平和の大切さです。

戦争のことや原爆のことは、昔から知っていたが長崎の原爆はあまり知らずにいたのですが、この長崎という地に訪れ、資料館やガイドをしてくれた人の話を聞き、想像もつかないような事があったという事実があって、今こうして何事もなく暮らすことができているが、この事実を日本以外の国にも戦争や核兵器を使ってはならないと深く感じ、伝えていかなければいけないと思った。

僕の思う平和はみんなが楽しく、人を愛し優しい心をもち、みんなが手と手を取り合っていくことが平和に一歩二歩と前へ進むのでないのかと僕は思う。



平和公園にある長崎の鐘

私の
平和宣言

ひとりで見る夢はただの夢、みんなで見る夢は現実になる

この言葉は、かつてビートルズにいたシンガーソングライターのジョン・レノンが言った言葉で、一人では平和を実現するのは難しいけど、みんなで地球上の人々が平和を願えばきっと叶うはずだと僕は実現していきたいと思います。

まずは周りの人たちから伝えていけるように努力していきたいということで、ひとりで見る夢はただの夢、みんなで見る夢は現実になるを平和宣言にしました。

1 学習テーマ 原爆と向き合う～平和をめぐる思考～

僕は平和祈念式典で「長崎は二番目の被爆地ではない 最後の被爆地だ」と強く言っていたのが、一番印象に残っていました。広島は世界で最初の被爆地で長崎は世界で2番目の被爆地だと僕も思っていましたが「長崎は二番目の被爆地ではない 最後の被爆地だ」と言うこの言葉に二度と原爆を使わないなどのたくさんのメッセージが込められていてそのメッセージをたくさん的人に届けるのが大切だと思いました。

原爆資料館に行ったときに全身やけどをしている人や焼け野原となった町などの被爆後の写真を見たときに実際に起きたことだと思うとすごくショックを受けたし、言葉が出ないくらい苦しくなりました。資料を見ただけの僕が、言葉が出ないくらい苦しくなったのだから、実際に原爆を体験した人たちがどれだけ苦しかったのか僕には想像もできませんでした。

今もこの瞬間にたくさんの人が戦争で苦しんでいて、同じように自分が住んでいる町がなくなり、大切な家族を亡くしているのだと思うと胸が痛くなりました。けれども現実と向き合うことでたくさんの人に知ってもらい、もう二度と原爆は使ってはいけないと思う人が増えると思いました。

僕はこの事業で原爆や戦争のことをたくさん知り、実際に原爆の被害、原爆の恐ろしさや残酷さ、平和の尊さなどたくさんのことを知りました。これからは今知ったことをたくさん的人に伝えて、長崎を最後の被爆地にするために少しでも貢献したいと思いました。



平和祈念像

2 感じたこと、学んだこと 原爆は恐ろしいもの

今回、この平和学習を通して僕は「原爆は恐ろしいもの」ということを何度も感じました。原爆資料館で原爆が起きる前と起きた後の町の写真を見た時に80年前に長崎で起こったことだと思えないほど衝撃でした。被爆者の話を聞いたときに熱風や放射線でたくさんの人がなくなって遺体が道に転がっていたのを聞き、「原爆は恐ろしいもの」だと思いました。

被爆者は原爆の話をするのがつらいはずなのに原爆のことが忘れないために話してくれていることがわかりました。

「原爆は恐ろしいもの」だからこそもう二度と使ってはいけない、そのためには僕たちが伝えていきたいです。

私の
平和宣言

全ての人に平和を

今、世界では戦争が起こっていて苦労している人がたくさんいます。その人たちにも平和を届けたいし、被爆者の人が言っていた争いをなくしたい、という思いを達成できるように「全ての人に平和を」にしました。



1 学習テーマ 原爆と向き合う～平和をめぐる思考～

今回の派遣事業では、2回、当時の話を聞かせていただける機会がありました。もちろん一人ひとり考える平和の形は違ったし、平和に対する想いも違いました。しかし、全員に共通していたことは、平和について考えさせられたきっかけ、そして悲しく苦しい気持ち、その原因はすべて「原爆投下」によるものだったということです。

私は原爆を経験していないですが、それでも想像するだけで目を背けたくなるような内容ばかりでした。ですが、現地の人はその思いを乗り越えて、「長崎を最後の被爆地に」と自分たちだけでなく今後の未来についても考えている心の強さと優しさに私はものすごく感動し、私たちには後世にこれを伝える義務があるのだなと感じました。

2 感じたこと、学んだこと 言葉にできない想い

私はこの派遣事業に、原爆資料館などで「根拠のある資料がほしい！」と思い参加しようと決意しました。ですが、3日間を過ごす中で、現地の方の話や被爆者の方の話を聞く中で、「言葉にできない気持ち」が芽生えてきました。この気持ちの正体が知りたいと思いましたが、3日間では見つけることができませんでした。ですが、一つ確信したのはこの「言葉にできない気持ち」を感じるためにこの長崎に来たのだなということです。

たしかに根拠のある資料というのは大切かもしれないけど、この感情は現地に立った人にしか分からないような気持ちで、この気持ちは被爆者から戦後を生きる人全員が80年前から一度たりとも忘れてはならない感情なのかもしれませんと感じました。



原爆資料館にある原子爆弾の実物大模型

私の
平和宣言

小さな言葉で心は大きく動いた

私は「原爆を落とした理由」「原爆を落とされた人の気持ち」すべてにおいて理由を求めていました。私は広島出身だったので原爆の話はたくさん聞いていて、「苦しくて辛いんだよ」などという感情が生まれることは当たり前だと思っていました。

ですが、長崎という場所に行ってみると、昨日まで笑っていた家族がいなくなること、いつも通り帰っていた家がなくなること、というのは当たり前なんかではなく、「辛い、苦しい、悲しい」という感情を感じるのは理由なんてなくても十分すぎるほど理解ができました。

そこから私は「どうか忘れないでほしい」という小さな言葉で、理由などなく残り��けてしまう想いを絶対繋いでいきたいと感じました。この平和宣言を通して、より多くの「平和」と「形のない想い」をたくさんの人伝えいけたらいいなと思います。

1 学習テーマ 原爆と向き合う～平和をめぐる思考～

現地ではこのテーマに基づき、原爆の資料とともに平和に対しての考えを深めることができました。特に、私はこの派遣事業で人からの直接の言葉を通して、平和に対しての考えを深める機会が多かったと思います。実際の人からの声は資料や映像などよりも直接私の心に語り掛けているお話が多くすべての言葉や表情、身振り手振りなどが深く印象に残りました。そういうことを直接伝える被爆者の方が年々減っている今、語り継いでいくのは私たち、次世代だと感じました。その経験を活かし、被爆体験や現地の方の思いや声を語り継いでいきたいです。

2 感じたこと、学んだこと 現地の方の想い

私は今回長崎に行き、現地だからこそ学べること、それは現地の方の実際の思いや声だと考えました。そして私が現地の方から聞き、忘れられない言葉があります。それは平和案内人さんの「長崎は2番目の被爆地ではない、最後の被爆地だ」という言葉です。今回2人の平和案内人さんに現地を案内してもらいましたが、2人とも同じその言葉を言っていました。その言葉には案内をしてくれた平和案内人の方もう絶対に被爆地を生んではならないという現地の方の想いと、それを伝えようとする強い意志が含まれていました。実際に現地を訪れ、人々の言葉や表情から感じ取れるものは、教科書や映像だけでは決して得られない貴重な学びでした。長崎での体験は、平和の尊さと、過去を忘れず語り継ぐことの大切さを私に教えてくれました。平和の重みを実感し、私たち一人ひとりが未来の平和をつくる責任を持っていることに気づかれました。今後、私もこの学びを周りに伝えていきたいと思います。そして、戦争や核の恐ろしさを正しく理解し、二度と同じ過ちを繰り返さないよう、日々の生活中でも平和について考える姿勢を持続したいです。そのためにも、今回の経験を心に深く刻み、自分にできる行動を少しづつでも実践していくうと思います。

私の
平和宣言

長崎を最後の被爆地に

前文にある通り、この言葉は長崎の現地の平和案内人さんの声であり、私が長崎で一番心に残った言葉もあります。「長崎は2番目の被爆地ではない、最後の被爆地だ」という言葉を聞いたとき、胸が締めつけられるような思いがしました。そしてこの言葉の影響で、私は原爆がもたらした状況や悲惨さを、より多くの人に正しく伝えていきたいという想いを強く持つようになりました。

私は、平和への大きな一步として原爆の廃止があると考えています。核兵器が存在する限り、同じような悲劇が繰り返される可能性はゼロではありません。だからこそ、一人でも多くの人が過去の出来事を知り、平和について真剣に考えることが必要だと感じました。



1 学習テーマ 原爆と向き合う～平和をめぐる思考～

私たちの班では原爆という存在は本当に「悪い」それだけだろうか。そんな問い合わせから始まり、原爆について重点を置いて調べていきたい、いろいろな人の立場や方向から原爆について考えようと思い、このテーマにしました。

原爆資料館に行き、原爆によって溶けたガラスや熱線に焼き付けられた影などの現物を見て、肌で原爆の恐ろしさを感じました。特に城山小学校平和祈念館では、現地に行ったからこそ感じる戦争、原爆の悲惨さがありました。

私は平和な世界になるには一人ひとりが少しずつ我慢して相手を認め合うことで成り立つと思っています。お互いに分かり合おうとする努力をして、一人ひとりが譲り合いながら生きることができれば、平和な世界に近づいていけると思っています。

2 感じたこと、学んだこと 私たちができること。やらなければいけないこと

私は今まで、戦争というのはどこかで自分には関係のないものと思い、進んで知ろうとしていませんでした。でもこの3日間を通して80年前の原爆が落ちた日のこと、その後復興に向かって歩んできた道、そしてこれからにつなげるものの、たくさんことを知ることができました。その中でも私は平和案内人さんの言葉がとても心に残っています。今回私は2人の平和案内人さんに町を説明してもらいましたが、共通して「原爆が落ちたのは長崎が2番目ではない。」そうおっしゃっていました。長崎は2番目ではなく最後にしなければいけない。そのために動かなければいけないのは私たちです。



平和案内人さんのお話

戦争というのは自分に関係のあること。今回の派遣事業で私たちが伝えていかないともう後がないという事実を突きつけられました。被爆者の方たちは高齢化が進み、人数が減ってきてしまっています。もう後回しにはできません。

今の自分には何ができるのか。私はずっとこの問い合わせについて考えていました。私の中での答えは、一人でも多くの人に关心を持ってもらい原爆、戦争の恐ろしさを知ってもらうことだと思っています。私一人では行動を起こしても難しいかもしれないけど、同じ思いで、熱量で平和を願う人々が集まればその影響力は一人よりもはるかに大きくなると思います。

なので戦争や原爆について、深く学ぶことのできる機会をたくさんの人々に届けること、それが私にできることだと思いました。



私の平和宣言

みんなの平和を認め合える世界

「平和とは何か」この答えは人それぞれ違うと思います。争いが起きるのは自分の欲しいを手に入れようとしてしまうからだと感じます。平和といつても人それぞれ価値観が違ってくると思います。だからこそ一人ひとりの平和が尊重されることが平和な世界につながる第一歩になると思います。

1 学習テーマ 原爆と向き合う～平和をめぐる思考～

私たちの班は、事前学習の時点で班員の原爆に対するイメージに大きな違いがありました。そこで私たちは、その「違い」を活かせるテーマを設定しました。それにより、原爆資料館の見学や平和案内人の方と原爆遺構を巡る体験、平和祈念式典への参加などを通じて各自の視点で平和を考え、探究することができました。

また、被爆者の末永さんや平和案内人の皆さんから、伝えることを諦めず語り続けてくださったおかげで、原爆のことを深く学ぶことができました。これらの体験は「次は私たちが伝える番だ」という自覚を芽生えさせてくれました。



初めてこの目でみた平和祈念像

2 感じたこと、学んだこと 考え続けるきっかけ

私は「きっかけ」は人を動かす最大の原動力だと感じます。その証拠として私は今回の派遣事業を通して平和学習のデザインに強い興味を持ちました。これは、事前学習で出会ったNPO BORDERLESS FOUNDATIONの中村さんや長崎で交流したPLABの方々など、平和に向けて活動している年齢の近い方々との出会いが大きなきっかけでした。

具体的に私がしたいことはもっと戦争や原爆の話を身近なものにすることです。これは軽い気持ちで戦争の話題を共有することを薦めているのではなく、戦争や原爆のことを考える機会を今より多くしてほしいという意味です。

戦後80年という数字を見て感じるのはやはり、記憶を伝える人が少なくなっていくことです。話す人がいなくなってしまうと、80年伝え続けられてきた戦争や原爆の記憶が風化してしまいます。戦争は本当にあったのに、原爆は本当にこの地に落とされたのに、その記憶が今の日本からどんどん消えていくことは日本の信念である平和主義を揺るがすことに繋がりかねないと思います。戦争は決して忘れられてはいけず、人間がいる以上議論し続けるべき問題です。だからこそ、いろんな人に戦争や原爆のことを自分ごととして考え続けてほしいです。特に、これから未来を作る同世代の人に考える機会を増やしたいと思っています。

私の平和宣言

私が「きっかけ」になる。

私は色々なことを考えることが好きです。特定の物事を考えているとその物事の可能性や問題点、疑問点など様々なことが見えてきます。戦争や原爆においてもそうです。考えることでそれらの本質的な課題や違った一面、他の視点からの見え方に気づけると思います。だから私はその「考える」きっかけになりたいです。考えるにはそのものることを知ることも大切ですから、まずは私が身近な人に今回得た戦争や原爆の知識を広める活動をしていきたいと思います。戦争や原爆の話に少しでも興味を持って考えてもらうことを目標に、これを宣言します。



Group B



被爆者の証言には、数字や文字では伝わらない
思いがあり、二度と同じ過ちを繰り返しては
いけないという強い願いが込められていた。



学習テーマ

過去～現在～未来 一おもいを結ぶー

私たちにできることは、80年間つながってきた思いを未来へ結ぶことです。
被爆者の高齢化が進んでいる今、思いを聞いた私たちは未来へとつなげ、
糸が決してほどけない様に強く、固く、結んでいきます。
あなたも未来へ平和をつなげていきませんか。



B班

天沼中学校 2年

おざわ ゆうな
小澤 侑奈

1 学習テーマ 過去～現在～未来 一おもいを結ぶー

このテーマにした理由は80年前長崎で何があったのか、今に至るまで平和やおもいはどのように結ばれてきたのか、未来を担っていく私たちにできることを考えたかったからだ。

80年前長崎に、原子爆弾が落とされた。太い鉄が曲がるぐらいの熱線、台風の15倍以上の威力で鳥居を飛ばすほどの爆風、五感で感じられずじわじわと人を蝕む放射線、300m上に7700℃もある火球などで、数えきれないほど多くの命、生活、おもいを一瞬にして奪った。

被爆後も周りからの差別やいつ病気になるか分からなく辛い日々。現在、被爆者の方は思い出したくない被爆体験を世界の平和のために語っている。高齢化により被爆者なき時代が迫る中、長崎では大学生も平和を伝える活動を行っている。長崎で過去に起こった悲惨な出来事から目を背けずに1人でも多くの人に戦争や核の恐ろしさを伝えたい。過去から今まで受け継がれてきたバトンを私たちの手で未来へつないでいく。

2 感じたこと、学んだこと 絶対に忘れない、忘れちゃいけない

投下目標地点よりも爆心地は大きく離れていた、広島よりも亡くなった方や被害は小さかった。そんなの関係ない。たった1発、たった10秒、ほんの一瞬の出来事で、何万人もの1人1人の大切な命や生活やおもいが人の手で作られた核兵器で奪われたことが許せなかった。被爆した後も被爆者は障害や病気、差別に苦しみ続けている。そんな辛い過去を二度と繰り返してはならないし、1発で20万人以上を苦しめる核がこの世に1万2千発以上あることはいけないと心の底から思った。



黒焦げの死体と町の様子

目を開けたまま真っ黒こげになっている死体、皮膚は剥がれ骨や筋肉が見える人、顔が膨れ上がって穴が3つ空いているだけの人、肛門から内臓が飛び出している人、手術しても取れないくらいまでガラスが体内に入った人、それらを横にしながら、屋根のない部屋で寝るってどういうことだろうか。自分がそこにいたら、涙が出ないぐらいショックで耐えられず死にたくなるだろうなと思った。想像と写真だけでこの感情なのだから、実際にあったらもっともっと辛いと思う。

永井隆博士は被爆後、自ら負傷しながらも医師として治療に当たったり、家を作るといわれても畳2畳でよいと言ったり、寝たきりで書いた本の収入を長崎復興のために使ったりと長崎平和のために人生を尽くした。

現地に行って過去に信じたくないけれど、絶対忘れてはいけない出来事があったこと、永井隆博士をはじめとした平和を祈る人が80年間おもいを結び、力をつないできたことを知った。
80年間のおもいを無駄にしないためにも、友達に伝えることから平和を広げていきたいと強く決心した。

私の 平和宣言 自分から知る

何もかも、自ら知ろうとしないと変わりません。知ることは物語の始まりであり、1番簡単で1番大切なこと。相手の生活、その場の状況、おもいなどを知らずに行動すると、大切なものを勝手に奪ってしまうかもしれません。過去、現在の様子、周りのおもいを知ったうえで、未来に向けて行動していきたいです。



1 学習テーマ 過去～現在～未来 一おもいを結ぶー

B班のテーマである「過去～現在～未来」について、僕は未来と現在の間をつなげる立場にいる人間なのだと思います。過去から現在はつながってきているからです。何がつながってきているかというと、世界を平和にしたいという意思です。それをつなぐことで、日本と世界の平和が実現できると思います。とともに、僕は感情的ではなく論理的に平和をつくるほうが良いと思います。なぜなら、感情的な意見はしっかりとした土台がなく、穴だらけだからです。なので、自分のテーマである「平和のつくりかた」では論理的に、またいろんな平和に対する考え方について詰めていこうと思います。

2 感じたこと、学んだこと 平和のつくりかた

僕は長崎での3日間を通して、長崎の被害の様子の見学や被爆者の方の証言を聞かせていただきました。そこで自分は「今の日本には戦争を経験した人が減っていて、若い人は平和の下、のほほんと生きているのではないか」と思いました。いわば、平和ボケというものです。戦中と戦後の苦しさを知らない。どれだけ苦しかったかは自分にも分かりませんが、絶望と悲しみに明け暮れながらも生きていくことが現代人にもできるとは考えられません。

そこで、自分は、今の日本からどうやって世界平和をつくるか考えてみました。これはあくまで自分の考え方ですが、憲法9条を世界にも広めていかなければいけないと思います。憲法9条は戦力を持たずに戦争を放棄するというものであります。(自衛隊は戦力には含まれないため違反していないと考えられていますが、違反だとする人もいます)これが実現すれば世界全体の軍縮、核兵器の廃絶にもつながると僕は思います。また、被爆者の方の思いである「広島、長崎のようなことを二度と起こさない」も実現できると思います。



長崎に停泊する護衛艦



私の平和宣言 善と悪の区別をつける

勝てば官軍、負ければ賊軍という考え方や、戦争を始めた国が悪という考え方など、様々な考え方がありますが、善か悪かの区別がつかないことは世界中に多々あると思います。そこで、自分なりに善と悪を分けることによって、物事を簡単にとらえられると思います。戦争や平和は難しいものですが、一般人が解決できることなんて無いに等しいものです。でも、理解しておくことで「なぜそれを行ったのか」などが分かるようになり、不信感が解消できると思います。

また、差別という言葉では人によってはマイナスにとらえられることがあります、区別という言葉ではその物事両方に関心を向けているようにとらえられるので、差別と区別の使い分けも重要だと思います。

1 学習テーマ 過去～現在～未来 一おもいを結ぶー

私は今回フィールドワークで平和案内人の方に2回、当時のことについて説明していただく機会がありました。私の班の方は被爆した方ではありませんでしたが、とても深く、充実した説明をしてくださいました。それは、過去を生きていた人たちが記録に残してくださったから、戦後を生きる世代の人達がそれを知り、学ぶことができて、今の私たちも詳しいことを学べているのだと思います。その受け継いできた、事実、想いをここで終わりにせず、未来にしっかりとしていくことが、現代を生き、未来を生きる私たちにできることだと考えます。

その未来につなぐ活動をしている「Peace Education Lab Nagasaki」の方々と今回は交流する機会をいただけて、どんな思いをもって活動していらっしゃるのか、実際現地に来た人、いる人にしかできないことは何なのかについて、一緒に考え、自分の中の答えを出すことができました。



Peace Education Lab Nagasakiの方々との交流

2 感じたこと、学んだこと “あの日”だけではない

原爆資料館の最後の展示コーナーに「おわりに」と文章があり、その一部分に「『あの日』だけでなく『いま』も苦しんでいる人がいること、そして『未来』さえも苦しまなければいけなかったこと」という言葉がありました。私はこの言葉を見て、今、自分が笑って楽しく過ごしている今日は、被爆した方が、被爆二世、三世の方たちが後遺症に苦しんで生きているかもしれない今日なのだとしました。

だからこそ、原爆は過去の被害ではなく今の被害もある、自分が生きている今日を生きたかった人たちがいる、それをしっかり考えたうえで、起こってしまった被害をどう意味のあるものにして、未来の平和についていくのかが私たちの考えるべきことだと思います。そして、80年守ってきた平和をこの先も守っていくことが、被爆した方々の想いを受け継ぐことにつながるのだと思います。



私の平和宣言 平和の鳩がいつまでも飛び続けられる世界を

私は平和祈念式典に参列した時、市長さんが平和宣言を読み上げた後たくさんの中鳩がいっきに飛び立っていくのがとても印象に残りました。その鳩たちがどこまでもいつまでも平和を運んで行ってくれるように感じて、その鳩たちが飛び続けられる環境を、世界を作っていくのは未来を生きていく私たちに託されていることだと思います。

1 学習テーマ 過去～現在～未来 一おもいを結ぶー

私は、現在進行形の形で平和を目指す意味や核の考え方について発表をします。けれど原爆資料館で見た原爆投下後の黒焦げになっている死体や原型のない建物、被爆者の方々から当時のことや平和への思いを聞いて、人々の平和に対する思いや、平和を願う気持ちは世代を超えて同じ思いを持っていると思いました。

今でも核兵器は存在し、長崎や広島で落とされた原爆よりも強力なものが使われる可能性もある世の中であると聞いて「平和」とは程遠いもののではないかと思いました。しかし鈴木市長の言葉にあったように、一人ひとりの力は小さくても、それが結集すれば、未来を切り拓く大きな力になります。戦後の被爆者の立場は周りに隠しておくべきことと考えられ、子供や家族を持つことも許されなかったのです。しかし昨年、被爆者たちの平和を目指す姿勢や、何年も声を上げ続けたことで、日本被団協が「ノーベル平和賞」を受賞したのです。被爆者の高齢化が進む中、私たちにできることは、思いを繋ぎ、結ぶことだと考えました。

2 感じたこと、学んだこと 知る意味

私にとって長崎での3日間で見たことや知ったことの中には、目を背けてしまいそうな写真や心が痛むような話が沢山ありました。そして、知らなかつたこともたくさんありました。見ないと分からぬことがある、聞かなければ分からぬことがあります。私にとって80年前の出来事は悲惨な出来事であるけれど、同じ悲劇を起こさないためにも私たちはもっと知るべきです。振り返りたくない過去のことではないのです。

平和を実現するためには歴史を知り、人々と対話していくことで平和への土台が作り上げられると思いました。

教科書やニュースだけでは伝えきれない現実がある中で、私は「命の重さ」に気づかされました。被爆者の証言には数字や文字では伝わらない思いがあり、二度と同じ過ちを繰り返してはいけないという強い願いが込められていました。この事業を通して学ぶことだけでなく、今の自分に何ができるかを考えさせられました。戦争を知らない世代がほとんどとなった今、私たちは知った以上、伝える責任があります。一人ひとりが平和への意識を持つことが未来の戦争や核の脅威を防ぐ第一歩だと思いました。



平和公園の鶴



私の平和宣言 笑顔を伝染しよう

今の私は幸せです。日々笑顔で過ごせています。でもこの地球のどこかで泣いている人もいます。一人が笑顔だと周囲の人も自然と笑顔になれると思います。そのためには、武力で解決するのではなく、対話をすることが平和への一歩だと思いました。

1 学習テーマ 過去～現在～未来 一おもいを結ぶー

被爆の悲しみを単なる過去の出来事として終わらせず、現代の私たちの行動と未来への責任へつなげるこの重要性を学びました。原爆資料館に被爆者の写真が展示されているのは、当時誰かが後世に託そう(繋げよう)という思いから撮影し、記録として残してくれたからこそです。誰かが記録や経験を残すという行為は、次の世代が忘れることなくその思いを受け継ぐための大切な橋渡しだと感じました。

また、平和公園を訪れた際、噴水「平和の泉」のそばにある石碑に刻まれた、当時9歳だった山口幸子さんの手記が心に残りました。「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて とうとうあぶらの浮いたまま飲みました」という言葉は、命をつなぐはずの水すら奪う原爆の非人道性を鋭く伝えています。現地でこの言葉を目にし、原爆被害が脳裏に浮かび、当時の悲惨さを未来に繋ぐ必要性をより深く実感しました。さらに、被爆体験講話では、「目玉が飛び出ている」「焼けた肌が服のように垂れ下がる」といった、文章では表し難い生々しい話や描写を直接伺いました。被爆直後の惨状や、当事者の苦しみを伴った記憶が語られる瞬間に立ち会い、その重みと現実を肌で感じたことは、記録や資料だけでは得られない貴重な経験でした。

2 感じたこと、学んだこと 声を紡ぐ意味

初日、長崎の医師・永井隆さんが遺した「如己愛人(によこあいじん)」という言葉を学びました。これは聖書の「自分のように人を愛しなさい」という教えに基づき、被爆後の混乱の中でも人々に深い愛と献身をもって接した永井さんの生き方を象徴しています。それは過去の悲惨な出来事を超えて他者を思いやり、支え合うことの大切さ、偉大さを改めて考える重要な気づきとなりました。

翌日の平和祈念式典では、長崎の小学生たちが歌う「クスノキ」の合唱が会場を包みました。大きなクスノキが長い年月を生き抜き、記憶を見守ってきたように、澄んだ歌声もまた過去の出来事や人々の思いを未来へと運んでいるように感じました。さらに、長崎市長が語った「長崎を最後の被爆地にする」という言葉は、私たちに平和への強い決意と責任を託すものとして心に刻まれました。一方で、被爆者の平均年齢は86歳(現在約9万人)となり、実体験を直接語れる方々の人数は年々減少しています。これからは、私たちがこうした思いや証言を受け取り、自分の言葉で次世代へ伝えていく役割を担わなければなりません。



いま青々と茂る2本のクスノキ



私の平和宣言 声を紡ぐ

被爆体験や平和への願いを、「ただ聞く」だけで終わらせず、自らの声で、小さくても伝えていく存在でありたい、という決意です。なぜこの宣言を考えたかというと、平和祈念式典や資料館で感じた「伝えることの責任」の重さが、誰かの心を動かす力を持つことを体感したからです。そして、それは遠い未来への希望にもつながるからです。この宣言は、私がこれから の学校や地域の中で、小さな声でも発信し続けていく覚悟の表れです。

1 学習テーマ 過去～現在～未来 一おもいを結ぶー

B班は「現在を生きる自分たちが、過去から未来へ平和をつなげたい」というおもいをこめ、学習テーマを立てた。

テーマをもとに戦争や原爆の悲惨さ、被爆者や遺族のおもいを学んでいく中で、衝撃を受けた言葉がある。

「今、平和のバトンはどこにある？」

私はこの派遣でやっと、過去に起きた事実、多くの死者と被爆者たちのおもいを学んだ。この言葉に、自分は今まで平和を他人事として考えていたのだと気づかされた。

今年は戦後80年。被爆者の平均年齢は86歳を超え、戦争や原爆が生み出した悲劇を伝えられる人は年々減っている。被爆者や戦争体験者がいなくなる日が来る前に、多くの人に戦争と核の悲劇を知らせ、戦争と平和について考えてもらわねばならない。そのために重要なのは、知っている人が周りへ伝えていくことだ。過去に起きた悲劇、人々のおもいを、今度は自分たちが伝えていく。今、平和のバトンを握るのは私たちだ。

2 感じたこと、学んだこと 知ることが平和への第一歩

私はこの3日間で、「知ること」がとても重要な第一歩なのだと改めて感じた。

原爆資料館で何度も見た、全身が焼けただれて顔も判別できない人の写真。見た時はあまりの悲惨さに衝撃を受け、とても言葉では言い表せない複雑な感情を抱いた。また、被爆者の方から当時の話を聞いたときは、戦争の生の声が伝え続けられることの大切さを学ぶとともに、私もこの話をもっと多くの人に伝えていかなければと思わされた。



Peace Education Lab Nagasakiの大学生との交流の様子

Peace Education Lab Nagasakiとの交流で活動理由を質問したとき、話を聞かせていただいた大学生は「学校で平和について学んできて、せっかく長崎にいるのなら何かしたいと思った」と話していた。平和のために行動を起こそうとする原動力は、自分が「知っている」ことにあると思う。過去の惨劇を知ることで、平和がいかに尊いものなのか実感でき、つなぐ意識が芽生える。そして戦争を自分事のように考える人が増え、平和の大切さを伝える活動が連鎖していくれば、世界は平和に向けて大きく前進をするだろう。

知ることが平和への第一歩。この言葉を胸に、周りにも戦争と平和を伝えていきたい。



私の平和宣言 行動する決断力をもつ

「正しい情報を知る」「見て何を感じるか」「平和とは何か考え続ける」
平和をつくっていくうえで大切なことを、平和学習を通して様々な人から聞きました。そのすべてに共通していたのが、「自分で起こせる行動」ということ。平和活動をするのはハードルが高いと思っている人も多いと思います。ですが、「知ること」、「感じることも」、「考えることも」自分が起こす行動から始まります。一人ひとりが自ら行動する決断力を持つことで、平和へと近づけるのではないかでしょうか。



真実を知ってください。忘れないでください。
伝えてください。世界は決して安全じゃない。
それを伝えていくのは私たちです。



ありがとうございました



学習テーマ

繋ぐ～80年経った今、伝えたいこと～

私たちが学んだこと。

それは、考え、伝え合うことの大切さです。

未来に伝えていくには、戦争の悲惨さ、

見たことのない過去を知り、それを活かし自分で考え、

周りに伝え合うことを忘れないことが大切です。



1 学習テーマ 繋ぐ～80年経った今、伝えたいこと～

原爆資料館へ行き、最初に「すごい」と思いました。なぜなら、当時の写真や展示を見て、「たった一つの爆弾で、人間はこんな風になってしまふんだ。町はこんなにも悲惨な光景になつてしまふんだ」と思ったからです。実際に見て、肌で感じて原子爆弾の恐ろしさを知り、私たちと同じ人間がやつしたこととは思えませんでした。

また、放射線を浴びたことによる後遺症や、熱線を浴びたことによる火傷などにも苦しみ、生き残って元気だった人たちも、次々と亡くなつていったことを知り、胸が締め付けられるような気持ちになりました。本当に、残酷なことだと思いました。また、被爆者の方からの体験講話を聞き、改めて実際にこのようなことがあったんだと実感することができました。

2 感じたこと、学んだこと 忘れないでください。伝えてください。

長崎に落とされた爆弾は、プルトニウム型のファットマンという原子爆弾で、核爆弾そのものはソフトボールぐらいの大きさしかありません。掌程度の一つの爆弾が約7万4千人の命を奪い、長崎の約3分の1を破壊したのです。私はこの事実を知り、本当にあり得ないと思いました。原爆資料館で見た写真や映像はあまりの悲惨な光景で言葉が出ませんでした。建物は崩壊し、その下敷きとなり真っ黒に焼け焦げた、たくさんの遺体。なぜ罪のない人が犠牲にならなければいけないのかと見ていてとても苦しかったです。

被爆者の方からお話を聞き、印象に残っていることは「人類が滅亡する爆弾が世界にある。地球は安全じゃない」という言葉です。実際に世界にはまだ1万2千発以上の核兵器が存在します。この現実を知り80年経った今、被爆者の方々の思いを私たちが次の世代へ伝えていく「戦争は絶対にしてはいけないんだ」ということをこれから先の未来に訴え続けなければなりません。被爆者の平均年齢が86歳を超えた今、80年前の真実を知り、訴え続けるということは、私たちがやらなければならないことです。だから、真実を知ってください。忘れないでください。伝えてください。世界は決して安全じゃない。それを伝えていくのは私たちです。



爆風により一本となつた鳥居



私の平和宣言 平和を繋ぐ

この3日間を通して、核兵器という物の恐ろしさと命の尊さを知り、身近な人へ伝えることが未来へ平和を繋ぐことへの第一歩だと考えます。今の私たちにできることを積み重ねていけば、いつか核兵器のない世界が実現するかもしれません。そのために私は、「平和を繋ぐ」ことを宣言します。

1 学習テーマ 繋ぐ～80年経った今、伝えたいこと～

私が伝えたいことは、被爆の実相と、核兵器の廃絶を訴え、長崎を最後の被爆地とするという被爆者や市民の強い決意です。核兵器による悲惨な現実、核戦争の危機、そして次世代への平和への思いを、被爆の実相を伝えることで、世界中の人々の平和への連帯を呼びかけることが求められています。この学習のテーマから長崎で学んだたくさんの被爆者の思いを伝えていくことが平和への一步に繋がると考えました。

2 感じたこと、学んだこと 現地に行ったからこそ感じられたこと

私は今回の平和学習で、原爆資料館や立山防空壕に訪れる機会がありました。原爆資料館には、被爆した女子学生が持っていた、熱線で焦げたお弁当箱が展示されていました。お弁当箱の中にはご飯のみが炭化した状態で残っており、当時の学生たちが厳しい配給制の中で、儉しい日常を過ごしていたことを感じ取ることができました。そして、建物疎開作業中に被爆した多くの学生の遺品も展示されており、当時の学生たちは学業だけでなく、戦争協力のための勤労奉仕に動員されていた悲劇的な実態を伝えています。



末永さんからお話を聞いている様子

立山防空壕は、長崎県の防空施策の中心的役割を担い、防空監視隊本部などが配置されていた場所でした。そこは、知事や県の偉い人が集まり、情報収集していく、狭い通路と部屋が続き、限られたスペースです。また、生活環境については、湿気が多く、空気も重いです。そこで、長時間の避難生活は肉体的にも精神的にも過酷な状況が窺えました。

さらに、被爆者の「末永浩」さんからお話を聞く機会もありました。末永さんは、当時9歳の国民学校4年生で、祖父母を頼って長崎県諫早市に兄とともに被害を避けるため、被害が少ない地域へ避難していました。あの日、ジャガイモの皮をむいていた時に突然、周囲が白く光り、「稻光にしては天気がいいな」と不思議に思っていたそうです。母親と妹2人は長崎で被爆し、そのうち一人は家族を残し、ガンで命を落としました。末永さん自身は長崎市内に入った際に被爆しました。戦後は教職に就き、被爆体験を伝える語り部として平和教育に尽力し、次世代に伝える活動を行っています。そして、「自分の体験を語ることで、戦争の恐ろしさと原爆の惨禍を伝え、二度と繰り返させないようにしたい」との思いを胸に現在も活動を続けています。また、原爆資料館周辺や山王神社、長崎大学医学部、如己堂を見学する際は、平和案内の方々に、その場所で何があったかなどを詳しく聞かせてもらうことができました。長崎の原爆を語り継ごうとする姿から、困難な時期でも希望を失わず、未来に繋げるための力強さを感じました。

私の平和宣言 世界情勢を我が事に

「世界情勢を我が事に」とは、世界で起きている出来事を他人事として捉えるのではなく、自分自身の問題として捉え、主体的に関わろうとする姿勢を意味します。国際社会が抱える様々な課題を他人事ではなく、自分自身の生活や未来に影響を与えるものとして捉え、解決に向けて行動したいという思いからこれを宣言しました。



1 学習テーマ 繋ぐ～80年経った今、伝えたいこと～

私たちの班では、どんどん減っている被爆者の話を私たちが後世につなげるという思いを込めてこの学習テーマにしました。

私が特に被爆者の話で印象に残っているのは、「人類が人類を滅亡できるかもしれない兵器を持っているんだよ」という末永さんの言葉で、最近はウクライナ侵攻やイスラエルとイランが戦争していたりして、第3次世界大戦は遠い未来ではなく、もうそこなのかもしれないし、そのせいで人類が滅亡してしまうという未来をなくすため、また、長崎を最後の被爆地にするために、一人でも多くの人に原爆の恐ろしさを伝えて、世界の1万発以上の原爆を0にしていきたいです。

2 感じたこと、学んだこと 平和派遣を終えて

私は3日間の平和派遣を終えて、「戦争の悲惨さ」や「原爆の恐ろしさ」などを改めて実感できた。学校の教科書には載っていない詳しいところ、例えば8月6日に広島に原爆が落ちて、その3日後に長崎に落ちた、などのように書かれているが、原爆資料館には原爆が落ちた経緯や広島や長崎以外の候補などが詳しく書いてあったり、表や写真、6本の瓶が溶けてつながった物などがあったりしていて原爆の威力がどれだけすごかったかが分かる。

また、私はそんなに戦争や原爆の知識がなかったので、事前学習や平和派遣1日目はとても驚いたと同時に怖かった。特に印象に残っているのは、「原爆の中心地から1km離れてても丸焦げ、2kmでも大やけど、もし生き残っても放射線で死ぬかもしれない」この恐怖をたった1発でできてしまうし、それがまだ世界には1万発以上もある。これを0にし、長崎を最後の被爆地にするために、私たちが伝えていくしかないと思いました。



溶けた6本の瓶

**私の平和宣言 世界に伝える**

80年前に起きた悲劇をまた繰り返さないために、身近な友達や知り合いなどに長崎で見たことや知ったことなどを伝えていきたいと思っています。友達もネットの記事よりも、友達が言っていることのほうが記憶に残りやすいので、そのまた友達、そのまた友達などにも伝わっていけば、ネットにもそのことを書いていけば、外国人にも伝わっていき、原爆や戦争がなくなっていくかもしれないで、みなさんも一緒に伝えていきましょう。

1 学習テーマ 繋ぐ～80年経った今、伝えたいこと～

現地ではなく事前学習の時ですが、被爆当時4歳の西尾睦子さんの話を聞きました。話の最後の方で西尾さんは、「10年後の被爆90年の時には自分はもういないかもしれない」とおっしゃっており、当時4歳だった人ですらこのようなことを考えるこの時代に被爆者本人から直接話を聞けることの貴重さと、実際に被爆などはしていない僕たちのような人が他の人に伝えることの重要性を改めて感じることができました。

また、平和を訴え続けることをしている、または、していた人の多くは、例えば永井隆博士が「如己愛人(自分のことを大切にするように自分の周りの人のことも愛すようにし、優しくしよう。)」という言葉を遺していくように、人への思いやりを大切にしていたことが分かり、平和を訴え、伝えていく側として、そのようなことを大切にていきたいと思うようになりました。



西尾さんの話を聞いている様子

2 感じたこと、学んだこと 実際に現地へ行くことで分かること

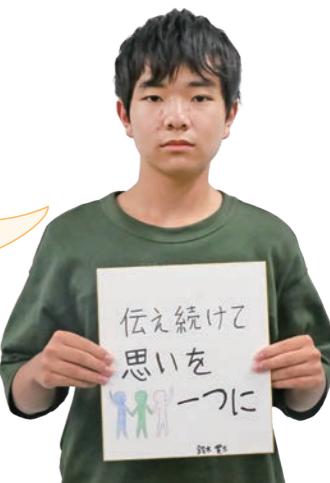
1日目に行った原爆資料館で特に印象に残っているものがあります。それは、原爆投下後、地面で亡くなった人が倒れている映像です。これは、現地で初めて見たものです。被爆者の西尾さんのお母様も、道路でそのような遺体をたくさん見たそうです。例えば、この周辺に核兵器が落とされ、自分がよく知っている町が変わり果て、道路には原爆資料館で見たような遺体がたくさん倒れている状況を想像すると、とても恐ろしいです。

このような、自分が住んでいる地域の周辺に核兵器が落ちることなんてありえないだろうというものが、僕が平和学習に行く前の考えでした。ですが、そうではありませんでした。2日目に長崎で話を聞いた、被爆当時9歳の末永浩さんは「地球上に、人類を絶滅させるほどの核兵器がある」「今は平和だが、核兵器のボタンを押してしまうと地球上が広島、長崎のようになってしまう」とおっしゃっており、現代は比較的平和であるものの、実際はいつどこで核兵器が落ちたりしてきてもおかしくないような、危険と隣り合わせであることもよく分かりました。

だからこそ、3日目のPLAB(地元の大学生・若者たちによる団体)の方たちとの交流時に、多くの人の目に入るような広告のコピー作成で、僕は「外国人がわざわざ訪れている広島・長崎を日本人は訪れないの?」というものを作りました。これは、被爆国である日本人々が、外国人の人々が眞実を知ろうとするために訪れている広島・長崎を訪れて、僕たちのように現地へ行くことで初めて分かるようなことを知ってほしいと思ったからです。

私の平和宣言**伝え続けて思いを一つに**

先ほど紹介した被爆者のお二方は「原爆や戦争で多くの人が亡くなっていることを知り、忘れないでほしい」ともおっしゃっており、この願いなどを伝え続けることの重要性を感じた今、それが僕たちの義務であると思いました。そして、細かな主張は違っても、「平和」を実現するという思いを多くの人に持つてほしいと思います。



1 学習テーマ 繋ぐ～80年経った今、伝えたいこと～

この学習テーマにした理由は、被爆者が高齢になり実体験を話していくことが難しくなっている今、戦後80年という節目に、改めて戦争について知り、後に伝えることが最も重要だと考えたからだ。

繋ぐことは、被爆者とのお話、NPO法人の方との学習、現地の大学生との交流などの、私たちがした経験を周りの人に伝えていくことで、少しずつではあるが達成できる。

では、経験を通して分かった80年経った今、伝えたいことは何かというと、私はその中の一つに、「知ること」があると思った。実際に被爆した地に行って、戦争や日本の過去について調べたりすることはもちろん、それが題材となっている作品に触れてみたりするだけでも充分で、昔のことは怖いといって意識的に避けることだけはしない。そうすれば、被爆者の想いを受け継いでいるのではないかと思う。

だからこそ、次世代に平和と戦争について、様々な方法で繋いでいくことが大切であると実感した。



大学生との交流の様子

2 感じたこと、学んだこと 百聞は一見に如かず

私は戦争について、どんなに調べたり、授業で聞いたりしても、本当に起きたことと実感することがなかなかできなかった。しかし、今回、実際に現地に赴いて話を伺い、被爆した地に足を運ぶ経験をしたことで、今までの戦争へのイメージが現実となり、自分の目で確かめる大切さを学ぶことができた。

印象的だった出来事は、主な被爆地に含まれる城山小学校平和祈念館の展示を見ている際に、当時生き残った学校関係者の1人が語り掛けてくださったことだ。彼は私と、隣にいた派遣生に、放射線による被害と、現在のX線の関係について話してくれた。当事者からの貴重な意見を聞けたという経験も、とても力になると思う。

また、平和事業に参加した生徒は各自自分の考えを持っていた。大学生とのディスカッションでの広告作りや、事前学習で行った平和デザインなど、様々な場面で意見交換することで、自分の考えを深められた。仲良くもなれたので、自分たちで行動し、高め合える仲間に出会うためには、自分が思うことを話してみると、いうことがとても大切なことだということも学んだ。

**私の平和宣言 如己愛人**

これは、長崎で被爆しながらも医師として尽力した後、平和を訴える著作活動をしていた永井隆博士の遺志です。己の如く人を愛せよ、つまり「自分自身を愛するように、等しく他者を愛しなさい」という意味で、平和な世界を築く第一歩だと思います。永井隆記念館で見つけたこの言葉は、私が漠然と考えていた平和とは何かを、的確に表していたため、平和宣言に選びました。自分にできることを徹底し、自分の思う平和というものを大切にして、生きていきたいです。

1 学習テーマ 繋ぐ～80年経った今、伝えたいこと～

私たちのメインテーマである「繋ぐ」には被爆者の思い、今の平和、笑顔を未来にも繋げていきたいという思いが込められています。終戦から80年が経ち、被爆者の方々はどんどん高齢になっていき、実体験を話せる人が減少してきているなかで、次に繋いでいくのは私たち若い世代です。

私は、被爆者の方から話を聞いて印象に残っている言葉があります。それは「世界は決して安全じゃない。長崎、広島にこんな被害をもたらした核兵器がまだ世界にある。」という言葉です。世界には核兵器が約12,000発あるといいます。私はこれを聞いて、核兵器1つ落とされたら今の当たり前の生活が一瞬で終わってしまうのだと思い、すごく恐ろしく感じました。しかし、被爆者の方は「若い世代の私たちなら乗り越えられる。」とも言っていました。私は原爆による被害を忘れないこと、それを繋いでいくことが今、私たちができることだと思いました。



被爆者の方から話を聞く様子

2 感じたこと、学んだこと たった一発の原爆で

私はこの派遣事業を通して原爆の恐ろしさ、平和の尊さをすごく実感しました。原爆資料館で見た道端に落ちているたくさんの死体、ボロボロに崩れ、焼け焦げている建物、熱線による痛々しいやけど、どれも忘れられません。忘れられないし、忘れてはいけないと思います。当時の方は被害の様子を見て「現実には思えない」「地獄絵図」「見るだけで気絶しそう」と証言したといいます。私は、原爆資料館で写真を見て、被爆者の方からお話を聞いて想像しただけで苦しくなったのに、実際にその場にいた被爆者の方たちは、もっともっと苦しかったと思うと心が痛くなりました。たった一発の原爆で、わずか3秒ほどの間に約14万人の人々に被害がで、命も奪われてしまったというのはすごく残酷で恐怖を感じます。もう二度とこのような出来事を繰り返さないためにも、今の幸せな日々に感謝して過ごしていきたいです。

私の平和宣言**何気ない日常を守り繋ぐ**

私たちが当たり前と思っている今の何気ない日常、それが当たり前ではないことを長崎に行って、戦争、原爆の悲惨さを知り、実感しました。だからこそ戦争、原爆についてよく知り、この何気ない日常をみんなが大切にして守っていきたいと思うことで未来の平和に繋げができるのではないかと思いました。

長崎で平和の活動をしている大学生の方も「昔から色々な人が作り上げてきた今の平凡な暮らしを守る義務が私たちにはある。」と言っていました。私もその通りだと思います。しかし、私たちの世代の人たちは戦争、原爆についてどうしても他人事のように思ってしまっている人が多いと思います。そこで、私が「こんなに悲惨な出来事があったんだよ。」とまずは身近な人たちへと伝えていき、少しでも戦争、原爆に興味をもつ人が増え、そのきっかけとなれるように頑張りたいです。



Group D



原爆の恐ろしさを知った私たちは
決して戦争をしてはいけないという
覚悟を持ちました。



学習テーマ

平和の力タチ～失ったもの 得たもの～

平和にはたくさんの力タチがありますが、
全世界が平和を望んでいることには、変わりはないのでしょうか?
80年前の後悔から平和を守り続けること、失ったものから得た後悔の上に
今の平和が成り立っていることを私たちは絶対に忘れてはいけません。



D班

中瀬中学校 3年

わき はやと
脇 勇斗

1 学習テーマ 平和の力タチ～失ったもの 得たもの～

このテーマで大切なことは本当に原爆や戦争で得たものはあるのかということです。確かに戦後、連合国は賠償金や原子爆弾という破壊兵器を得ましたが、本当にそれは得たものなのでしょうか。

例えば、イギリスは戦勝国として正義や勝利の国という肩書を得ましたがその代償としてドイツの爆撃機によって荒廃した都市、戦争による経済不況、得たものより失ったものの方が多い見えます。アメリカだってそうです。戦勝国のアメリカ、これはあくまで個人の意見ですが、日本の視点に立って見れば鎖国で平和に暮らしていたのに、アメリカのせいで軍の強化をしないと何時攻められるか分からない状況で、そして挙句の果てには欧米列強と同じ事をしていたら、悪い国扱いされ、民間人を無差別爆撃で大量殺害した国です。日本も中国に対して同じ事をしています。結局、枢軸国側も連合国側もお互いに人殺しには変わりありません。だからこそ、戦争はやってはいけないことだと分かっています。人々が殺し合い、町は破壊し尽くされ、友人や家族が死んでいくそんな地獄がずっと続くからこそ平和で、失うもの得るもののが何もないのが、一番良いと思います。

2 感じたこと、学んだこと 忘れてはいけない

僕がこの事業を通じて感じたことは忘れてはいけないと改めて感じました。なぜなら僕の身近では原爆の日や恐ろしさを知らない人がいるからです。そして事業を通じて特に印象に残ったものが2つあります。

1つ目は原爆資料館の展示やガイドさんの話です。ガイドさんの話では原爆の爆風によって防空壕に押し込まれ自分は助かった。でも母親や妹が死んでしまった。親が死んでしまって、子供だけが生き残ったという人々のエピソードや原爆資料館での爆風で折れ曲がったタンクや周囲一帯にある焼けた遺体を自分が住んでいる風景を頭の中で想像してみると地獄の様な悲惨な光景が浮かんできました。またガイドさんの話での被害にあった人々の視点を自分に置き換えてみると悲しさを感じました。

2つ目は城山小学校平和祈念館です。城山小学校では亡くなった教員の方や原爆で生き残った生徒たちが描いた絵などが展示されており、その中でも原爆の後遺症によって終戦日に亡くなっている教員がいました。また、生徒が描いた絵で原爆が落ちた直後に米軍の空母から飛行機が来たという説明に驚きました。長崎のすぐ近くに米軍艦隊がいたことは知らなかったので本当に驚きました。また、建物が当時のままなので天井を見ると鉄骨が出ている所がありました。これらから言えることは現地でしか感じられないことがあるということです。動画や番組の特集などで戦争について放送されている時がありますが、本当に現地でしか感じられない物も多くあります。だからこそ忘れないで覚え続けていけば平和への道だと思います。

私の 平和宣言 忘れず伝える

忘れず伝えるとは、簡単そうに聞こえるのに実際にやってみると難しいと思います。歴史に残る出来事は、最近ほど伝わりやすく昔ほど伝わりにくくなっています。例えば最近のものは東日本大震災等です。この震災は多くの映像、証言者がいます。しかし、原爆や戦争はどうでしょう。モノクロの映像、当時の事を知っている証言者は、減少し続けています。戦争を知らない現代人が戦争を知り、学び、再び繰り返すことのないように、未来の子供に伝え続けることで、平和は守れると思います。僕は風化させることのないように忘れず伝え続けます。



爆風で折れ曲がった給水タンク



1 学習テーマ 平和のカタチ～失ったもの 得たもの～

原爆投下に着目して、日本とアメリカ間の「平和のカタチ」について考えたとき、アメリカ軍側の原爆投下の理由について、私が原爆資料館で目にしたのは「何万人の米青少年を守るために原爆を投下した」という主張でした。これについて私は、今回実際に長崎に赴き、資料館に行ったり、被爆者の体験講話を聴いたりして、理由があっても絶対に原爆はいけないということを学びました。原爆の攻撃、および戦争によって数えきれないほどの尊い人の命、物が失われました。

しかし、一つだけ得たものがあると私は思います。それは「原爆の恐ろしさ」という教訓です。このたった一つの教訓を絶対に忘れないように、単なる事実・史実ではなく記憶として途切れず繋いでいくのがこれから役目だと思いました。

2 感じたこと、学んだこと 目に見えない恐怖

原爆が恐ろしく非人道的な理由の一つは、この「目に見えない恐怖」があるからです。目に見えない恐怖とは、熱線や爆風による即死などを免れて、たとえ外傷などがなくても、放射能によって髪が抜け落ちてしまったり、原爆白内障を発症したり、何十年後にがんなどを発症して亡くなったりすることです。

また、その被爆の範囲は「死の同心円」と言われるように、落下中心地から日に日に広がっていったそうです。今でも、被爆者のなかには「次は自分じゃないか」と怯えながら生活される方が多くいます。被爆80年「被爆者なき世界」が近づく今、私たちが原爆の恐ろしさを学び、伝え、つないでいくことが大切だと思いました。



被爆後遺症により髪が抜け落ちてしまった少女

私の平和宣言 まずは「知る」

これからの時代、世界でいちばん問題となるのは「知らない」ことだと思います。被爆からすでに80年が経ち、実体験を語れる人は刻々と減少しているのが事実です。このなかで、「知らない」のでは、また同じ過ちを繰り返してしまいます。だから私たちのような教育が与えられたこれらの未来を担う子供たちや若者が、「知る」ことから始まり、最終的には「知る」立場から「伝える」立場に変わら人々が増えていくと、この平和宣言の意味が達成されると思います。



1 学習テーマ 平和のカタチ～失ったもの 得たもの～

私は事前学習会で、赤十字社が敵味方の区別なく命を救おうとしていたことを知りました。実際に長崎の資料館へうかがったときは、救護活動について詳しく調べました。原爆投下後、長崎では多くの人だけでなく医療機関も甚大な被害を受け、多くの医師や看護師が命を失ったということを知りました。ですが、そんな中、生き残った医療従事者や学生たちが、わずかな薬や道具を使って必死に負傷者の手当てを行いました。

また、全国から救護隊が集まり、混乱の中でも懸命に人々を助けようとしていたことを知り、その姿勢に頭が下がると思いました。



救護中に使われたガーゼ缶

2 感じたこと、学んだこと 強さ

今回の平和学習で強く感じたことは、被爆者の方たちの「強さ」です。私は今回、救護について詳しく調べたのですが、被爆者の医師や看護師が自分たちも傷を負っている中、負傷者の手当てをしていました。そして現地の方のお話では、復興のために医療機関の方々だけでなく、被爆された民間の人々までもが復興に尽力したことも知りました。あのような状況でも意氣消沈するのではなく、未来のために頑張れる強さを知り、胸を打たれました。もしも、私が戦争の中、同じような状況に置かれたら、被爆者の方々のように強く頑張れないでしょう。泣いて誰かに助けを求めるしかできないのではないかでしょうか。

しかし、今回の学習を経て、泣くだけでは、誰かに助けを求めるだけでは未来は変わらないことを学びました。私自身もより良い未来へ向かって、頑張る強さをもって一日一日を大切に生きてていきたいです。

私の平和宣言 目を向ける

アメリカにも日本にも、双方の言い分があり、それに耳を傾けることもできたはずなのに、両国が武力で戦うことにしたのは、言い分の本質を理解できていらず、理解しようともしなかったのだと思いました。

「他人を理解する」とは、自分のことのようにすべてを理解し、喜怒哀楽を感じるというところまではいかなくとも、「なぜ相手がそう考えるのか」「なぜそのように行動するのか」という背景に目を向ける努力をすることだと思います。それをアメリカも日本もできていなかったのでしょうか。

相手の立場に立って考えることは簡単ではないけれど、対話とは本来、相手を変えるためのものではなく、まず相手を理解しようとする姿勢から始まるべきだと思います。理解の欠如が誤解を生み、不信が恐れを呼び、恐れが攻撃へつながってしまう。あの原爆投下も、そうした連鎖の果てに起ったのではないかと思いました。戦争ではなくても、私たちも周りの人の背景に目を向ける努力を怠ってはならないのです。



1 学習テーマ 平和のカタチ～失ったもの 得たもの～

原爆炸裂時刻である11時2分を示したままの柱時計や爆心地から約400mで発見された溶けた6本の瓶。直視するのをためらうぐらい悲惨な展示の数々。被爆資料を見て、長崎を一瞬にして変えてしまった一発の原爆の威力を肌で感じました。かろうじて生き残った人々も、後遺症に苦しみ、また、この先発症するかもしれない恐怖に耐え続けています。原爆は多くの人々の日常をうばったものだということを改めて理解しました。

原爆の恐ろしさを知った私たちは、決して戦争をしてはいけないという覚悟を持ちました。そして、平和がどれだけ大切なのか、平和を維持するのがどれだけ困難なことなのかを学びました。

学習の中で、被爆者の方のお話を聞く機会がありました。「平和とは好きなことができる」と「『行ってきます』『ただいま』と家に無事に帰ってくることが平和」とおっしゃっていました。話してくださった方のご家族は、家を出たきり帰ってすることはなかったそうです。被爆体験を聞き、ご飯を1日3食、食べることで、好きなことができて、安心して眠れる今の日常が「平和」なのだと、気づかされました。今まで当たり前すぎて見えなかった私の周りにある「平和のカタチ」が見えました。



原爆投下時刻で止まった柱時計

2 感じたこと、学んだこと 核のない未来にするためには

私は3日間の平和学習を通して、「考え続ける大切さ」を学びました。私は、ガイドをしてくださった平和案内の方や被爆者の方、平和をつくる活動をするピースエデュケーションラボの方のお話を聞き、共通する言葉に気が付きました。それは、「考えてほしい」という言葉です。長崎の悲惨な被害を伝えるだけでなく、「当時の人々の気持ちや現在の平和のあり方と一緒に考えてください」という呼びかけがあるのです。正解がない疑問でもみんなで考え続けることが、平和を維持するはじめの一歩だと思います。

被爆者の平均年齢が86歳を超え、被爆者の方から実際に被爆体験を聞くことが難しくなっています。だからこそ、原爆の悲惨さを聞いて知ったからには、事実を忘れず、伝え続け、考え続けなければいけないのだと思いました。

私の
平和宣言

自分事として考える

9歳で被爆した末永浩さんの「地球は決して安全じゃない」という言葉がとても深く印象に残っています。現在地球には、1万2240発もの核兵器が存在するといわれています。地球の上にいる私たちにとって、今もどこかで続いている戦争は決して他人事ではないのです。

自分に何もできないと思わないでほしい。考えてほしい。平和を考え、願う人が増えるほど、平和が近づくと思うから。

1 学習テーマ 平和のカタチ～失ったもの 得たもの～

私たちの副題は「失ったもの、得たもの」です。日本が戦争で失ったものには、たくさんの人々の命や生活など様々なものがあげられます。ですが、「戦争で得たもの」と聞いてぱッと浮かんでくる人は少ないのではないかでしょうか？私は、長崎で平和活動をしている大学生と交流し、大学生の方が「戦争で得たものは後悔だ」とおっしゃっていたことが印象に残っています。日本は戦争で犠牲者をたくさん出し、その後悔から「戦争をしてはいけない」という教訓を得ました。戦争での後悔を知っている日本だからこそできることはたくさんあります。戦争に負けるという経験をした日本だからこそ、戦争の悲惨さや「絶対に繰り返してはいけない」ということを世界に伝えていけるのではないでしょうか。



平和祈念像

2 感じたこと、学んだこと 核兵器のボタン

私は長崎で「核兵器開発」について調べました。調べた中には、人間のしたこととは思えないような内容も含まれていました。

核実験や、ナガサキ・ヒロシマでの原爆投下、さらにビキニ諸島での水爆実験などは、多くの人々の命や暮らしを奪い、地球の環境にも大きな被害を与えました。核兵器の開発には多くの研究者や科学者が関わっていますが、核を作った人だけでなく、核保有国の人々、被爆者、冷戦状態にある国の人々など、数えきれないほど多くの人々が核兵器と関わっています。そして、もし核が再び使われてしまえば、その被害は普通の爆弾とは比べものにならないほど大きく、未来にまで影響を与えます。

私は、核兵器が「ボタンひとつ」で使えてしまうのに、そのボタンを押しても核そのものをなくすことはできないという事実に強い恐怖を感じました。核を持つことが平和を守る手段だと考える国もありますが、私はむしろ核が存在すること自体が、平和をおびやかす原因になると思います。核兵器について調べたことで、今の平和は決してあたりまえのものではなく、多くの犠牲と後悔の上に成り立っているということを実感しました。

私の
平和宣言

「また明日!」が言える世界

私たちには明日があります。当たり前のように私は「また明日！」と言います。ですが、その言葉が嘘になってしまう国はいまだにあります。戦争をしている国では、昨日まで元気に笑っていた子が今日はもういない、そんなことがこの世界で起こっています。

私は「また明日！」と元気に言えて、その言葉が本当になる世界を実現したいです。



1 学習テーマ 平和のカタチ～失ったもの 得たもの～

私が戦争について考えたとき、まず最初に「平和」とは何か？という問い合わせが浮かんできた。戦争がないことなのか、幸せに暮らすことなのか、人によって「平和」の捉え方が違うため、長崎に行くまで答えを出すのが難しかった。長崎で戦争や、原爆に関する多くの資料や証言に触れ、自分なりに考えた結果、「平和」とは、自分の行動を制限されず、自由に発信し続けられることだと考えた。

被爆者の末永浩さんから当時のお話を伺ったとき、国民学校に通っていた頃は英語の使用を禁止され、国語の授業などで、戦争に関する教育を受けていたと知った。そのとき、今の日本と、当時の日本の大きな違いを強く感じた。

今、私がこうして、戦争や平和に関して語ることができるのは、行動が制限されず、自分の言葉で発信できる「平和」がここにあるからだと思う。

戦争によって、日本は多くのものを失った。原子爆弾の脅威は、大勢の人々の命を奪い、その悲惨な事実を私たちは知っている。だからこそ、さらに平和な未来を築いていくために、私自身がこの経験を伝え続けなければいけないと思った。



当時の国語の教科書

2 感じたこと、学んだこと 伝えていく、今私が持つバトン

平和学習で長崎を訪れ、永井隆さんの証言や、被爆者の末永浩さんの話を直接聞いて、「伝えることの大切さ」を強く感じた。現地で実際に耳で聞き、目で見て感じたことには、教科書や映像だけでは決して得られない重みがあった。

永井隆さんは、長崎医科大学病院で被爆し、救護活動を行い、その後も「伝える活動」を続けた。「その体験をした人がいなくなれば、また人間は戦争を始めるのでしょうか。」永井さんが訴えたこの言葉には、二度と同じ過ちを、繰り返させないという強い使命感を感じた。命が尽きるまで平和を訴え続けた永井さんの姿勢に強く胸をうたれた。

被爆者の末永さんも被爆体験講話で、「またボタンが押されれば、世界中が広島、長崎になってしまふ」とおっしゃっていた。原爆は一瞬で人々の命を奪うが、苦しみはその後も長く続く、原爆症や、白血病に苦しむ人々、放射線の影響への不安と共に生きる人々、その現実を直接聞くことで、戦争や原爆の恐ろしさをより鮮明に感じた。この二人が生涯をかけて当時の惨状や、自らの体験を語り続けたのはなぜか。それは、この事実を決して風化させず、平和を守り続けるという、強い意志があったからだと私は思う。

しかし、その声を聞ける機会は年々減っている。被爆の方々の平均年齢は高く、やがて直接お話を聞けなくなってしまう。だからこそ、平和学習でお二人の思いを受け取った自分が、その思いを自分の言葉で次の世代へつなぐことが大切だと強く感じた。伝えることは過去を忘れず、同じ過ちを繰り返さないための力である。

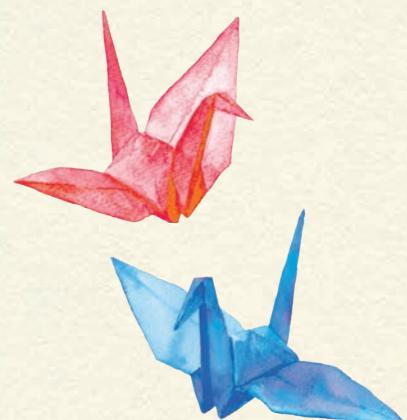
たとえ一人の力が小さくても、語り続けることで、平和への道は守られる。そう信じている。長崎での学びを胸にこれからもそのバトンを握り、未来へつなげていきたい。



私の平和宣言 バトンを繋ぐ

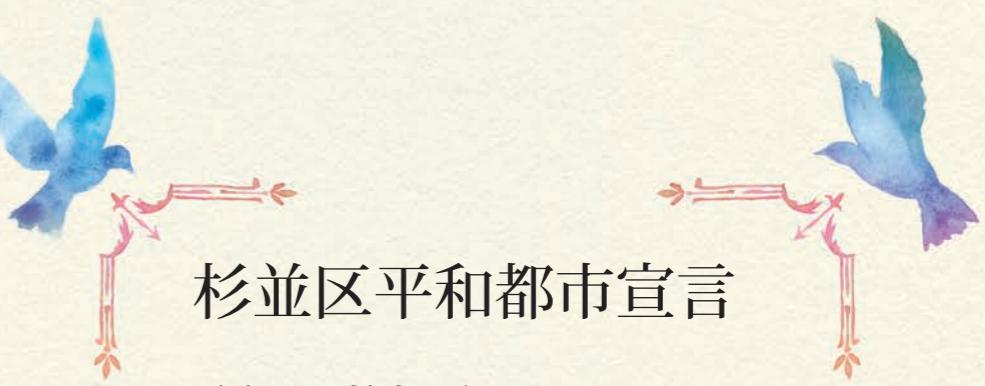
長崎に行った際、引率の先生から、同世代の同じく平和学習にいった生徒が「今バトンはどこにあるのか」という言葉を残したと聞き、とても印象に残りました。伝えることがバトンだとしたら、次は長崎に行った私にバトンはわたったのではないか、そう思いました。

今回長崎で聞いた証言などを、バトンを受け取った私が、次の世代などにバトンをつないで、平和な未来に向かうために「伝える」という行動を起こしていきたいと思い、この平和宣言にしました。





私の平和宣言



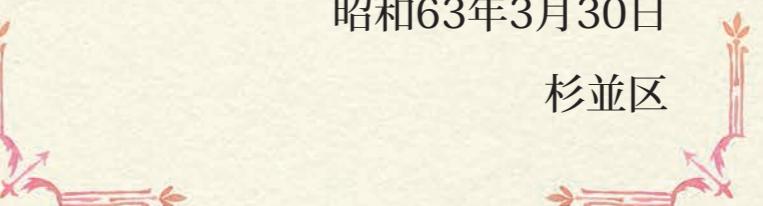
杉並区平和都市宣言

世界の恒久平和は、
人類共通の願いである。
いま、私たちの手にある
平和ゆえの幸せを永遠に希求し、
次の世代に伝えよう。

ここに杉並区は、
核兵器のなくなることを願い、
平和都市を宣言する。

昭和63年3月30日

杉並区



長崎平和学習中学生派遣事業は「杉並区次世代育成基金」を活用しています。

同基金は、次代を担う子どもたちが、将来の夢に向かって健やかに成長できるように支援するための区独自の仕組みです。



令和7年度

長崎平和学習中学生派遣事業報告書

令和7(2025)年12月発行

編集・発行

杉並区 区民生活部管理課 平和事業担当

〒166-8570 杉並区阿佐谷南一丁目15番1号

電話 (03) 3312-2111 (代表)

印刷:ash design

登録印刷物番号
07-0068



本書は杉並区のホームページでご覧になれます。





 杉並区

